

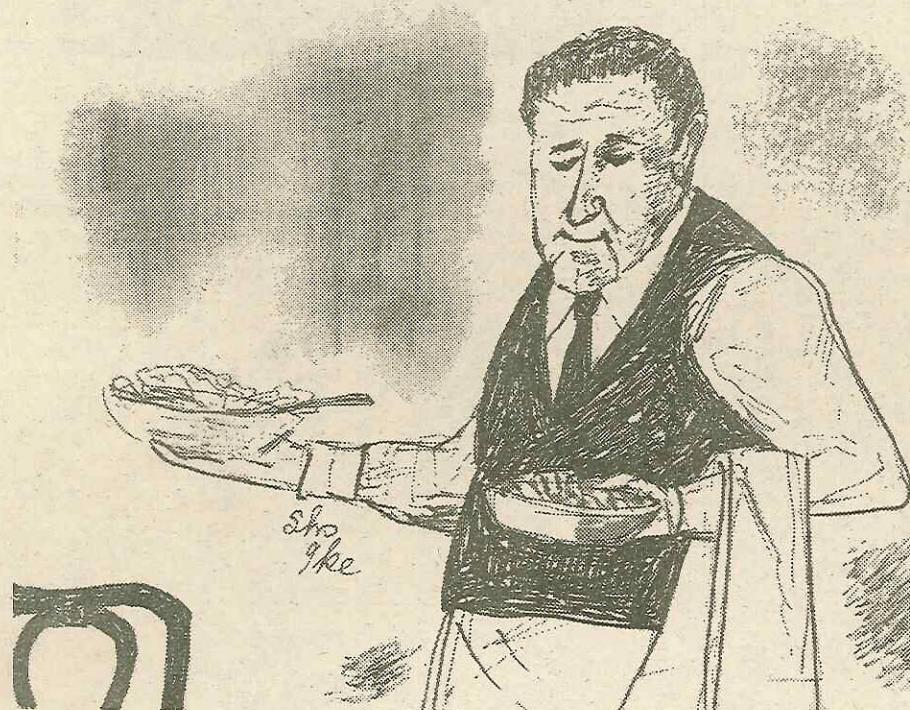
# ル・パ・ク・シ

池波正太郎

文・画

37

ギャルソン、アレックス



m

ギャルソン

アレックスは、パリの料理店の給仕主任をつとめている初老の独身男だ。安価で、よく流行っている料理店の、時分どきの調理場は、まるで戦場のようなさわぎとなる。

その調理場（裏）と客席（表）との間を行ったり来たりしながら、アレックスに扮したイヴ・モンタンが、水を得た魚のように、生き生きとした演技を見せる。むかしは、フランス映画の新鋭として鳴らしたクロード・ソーテ監督も、四年前に、この「ギャルソン」をつくったときは五十九歳になっていたが、今度も例によつて中年以上の日本人を堪能させる映画に仕あげてくれた。モンタンはソーテの映画に出ると、いつもよい。アレックスは、若いころに芸人（ダンサー）暮しをしていたことが、さりげない仕ぐさに偲ばれ、初老の男のベーソスが、たまらなくよかつた。当時六十をこえたばかりのモンタン、田舎の役者ぶりである。

海岸のリゾートに子供たちの遊園地をつくり、そこで小さな料理店を經營することが、アレックスの夢だ。この夢あればこそ、彼は多忙や疲労を物ともせず、あくまでも明るく、はたらきつづける。このところ、重苦しく退屈な映画か、徹くくなってしまつたSF、バイオレンス、オカルトのようなものばかり観ていた所為か、クロード・ソーテとイヴ・モンタンには胸がすいた。

アレックスが弟のよう面倒を見てやつてているジル・ペール（同僚のギャルソンで、ジャック・ヴィルレが演じる）や、シェフに扮したベルナール・フレッソン、ニコラス・ヴォゲルなど役者もそろつて、括りのきいた男たちの友情を見事に描出する。彼らは一日日に生甲斐を感じながら生きている。

それにしても、この映画が四年もたつてから日本で封切られるのは、ふしげでならない。むかしのフランス映画は、みんな「ギャルソン」のような映画だった。世の中は変つたのだろうが、人のありようは依然、変らないのだ。変つたとおもうのは錯覚にすぎない。